

福島広報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 小島 英二
編集 同 広 報 部

【巻頭言】



最上の喜びのために

福島市立三河台小学校長 小島 英二

新元号「令和」の始まりと共に、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す学習指導要領の全面実施が目前に迫ってきた。各学校では、新しい学習指導要領の趣旨の実現に向けて、社会に開かれた教育課程とするよう入念な準備を行い、授業研究も盛んに行われている。このような状況に日々身を置いていると、以前勤務した学校での研修を思い出すことがある。

山間僻地校から都市部大規模校に赴任したのは、自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力などの資質や能力を重視する学力観である「新しい学力観」という言葉が教育界を賑わせていた頃だった。当時は、学力観の転換が求められていたのに加えて、その学校はコンピュータを活用した教育の先進校と言われ、毎年開かれる研究公開には、全国各地から数多くの先生方が参観に来ていた。生徒指導上の問題も頻発していて、前任校とのあまりの違いに愕然とする毎日だった。

その学校では、研修日が必ず週一回は設定され、同僚の先生方は年齢の上下関係なく、新しい学力観の「何が新しいのか、どんな授業をすべきなのか」喧々譁々の議論を行っていた。年に数回は研究授業を行ったが、最もプレッシャーのかかるのは、外部に公開する授業ではなく、校内の全員に参観される全体授業だった。そこでは、「教科の本質に基づく新しい学力観に立った授業だったか」「コンピュータの活用に必然性はあったか」「ソフトの内容は授業のねらいを達成するのに適切であったか」が厳しく問われたのである。そんなある日、ふと疑問が湧いてきた。「先輩方は、なぜこんなに頑張れるのだろうか。自分に厳しく人にも厳しくできるのだろうか…」と。

社会科の公開授業者となった私は、その答えを考える余裕もなく、教科主任の先生に指摘されるまま教材研究で必死に外を駆けずり回り、指導案

を何度も修正して当日を迎えた。

授業は決してうまくいったとは言えなかったが、子どもたちが瞳を輝かせ、懸命に追究している姿に胸が熱くなった。教材研究に没頭し、必死に公開授業に向かって布石を打っていた頃から、不思議と生徒指導上の問題は消え失せ、子どもたちの授業に向かう姿も変わってきていたことに気が付いた。「子どもは教師の鏡」と言われるが、正にそれを実感できたのである。と同時に、同僚の先生方に抱いた疑問の答えらしきものも見えてきた。「先生方は、子どもたちが学習問題(課題)に真剣に向き合い追究した時にしか見せないこの輝く瞳と笑顔が見たいがために、それを見るのを最上の喜びとして日々頑張り、厳しく指導力を磨いていたのだ……」と。

ただ楽しいだけ、おもしろいだけの授業ではない。知的好奇心が刺激され、自分でルールを敷き、途中下車したり遠回りしたり(試行錯誤)しながら自分で終点まで走って行く授業……。その過程では、教師の助言を必要としたり友達との交流が必然的に行われたりする場合もあるだろう。教師は線路を敷く土台となる部分を作っておくイメージである。これら理想の授業像を校内で共有しながら同僚間で協働し、切磋琢磨する……。それが子どもの姿となって表れ、最上の喜びを味わった先生方の瞳はさらに輝いていくのだろう。

そうなるっていくための教師集団を作るために、日々校長は何をすべきなのだろうか。働き方改革が叫ばれている現在ではあるが、学校教育の中核である授業の充実に向けた取組が後退することはあってはならない。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かじ……。」

山本五十六大将が残した言葉が日々頭によぎる。

広報部活動について

福島地区広報部長

福島市立福島第二小学校長 佐藤 亮治

福島地区広報部は、会員相互の理解と連携を深め、様々な学校経営等の実践を誌面を通して相互に交流する中で、地区小学校長会の活動を活発に推進することを目的として、次のような編集方針のもと、年5回「広報福島」を発行する予定です。

- 1 校長職の機能の向上及び地区校長会の活動に寄与する内容をめざす。
- 2 課題性、適宜性、必要性、話題性に富んだ魅力ある広報誌を編集する。
- 3 全会員執筆を原則に、親しみと活力のある広報誌を編集する。

以上の編集方針を踏まえ、広報誌の内容は、「巻頭言」「学校経営の一端」「提言（特別寄稿）」「特集」「新会員紹介」「趣味・随筆」「各部だより」として、学校経営に資する内容を基本として会員の皆様に原稿の執筆をお願いしております。

特に、「特集」のテーマは、令和元年度の福島県小学校長会広報部の特集テーマである「ふるさと『ふくしま』の未来を担う子どもたちの育成」を受けて、「良質な教育活動の推進と教職員の資質向上」と設定し、各学校の取組を紹介していく予定です。具体的には、“少人数教育の充実”“子どもにとって安全・安心が保障できる防災教育・放射線教育の推進”“学校・家庭・地域が一体となった地域全体での教育の推進”“子どもの心の安定を図るSC・SSWの積極的活用”“時代の変化に対応できる教員研修の充実”“不祥事の絶無”等のテーマが考えられるほか、“新学習指導要領を踏まえた教育活動の実践”“教員の意識改

革と働き方改革の推進”等、今日的な課題もテーマとして考えられます。

第1号におきましては、昇任された校長先生方6名の紹介を掲載し、書面の都合から「特集」については、割愛いたしましたことをご容赦願います。

年5回の発行内訳は、

第1号 6月24日、第2号 9月24日

第3号 10月30日、第4号 12月9日

第5号 2月25日

としています。

東日本大震災とそれに伴う原発事故から8年が経過しました。新学習指導要領への対応や働き方改革等、学校現場では課題が山積しておりますが、「学校は復興の最大の拠点であり、シンボルであり、復興の活力源」と言われます。このことを会員一人一人が、認識を新たにして学校経営の充実を図っていきたいと思います。

そして、会員の皆様の玉稿は、ふるさと福島の未来を担う子どもたちの育成につながる知恵と勇気を私たちに与えてくれるものです。

今年度もよろしく願います。

編集後記

時代も平成から令和に移り、様々な対応が求められる今日だからこそ、授業の充実という学校教育の中核を大事にした学校経営の重要性をお寄せいただいた原稿から感じました。

福島市立矢野目小学校長 菅野信幸